大林組が所蔵するヴァン・モリ ヴァンの建築資料について

RESEARCH ON THE ARCHITECTURAL DOCUMENTS OF VANN MOLYVANN FROM THE ARCHIVES OF OBAYASHI CORPORATION

岩元真明 ——— * 1

キーワード：
ヴァン・モリヴァン, 大林組, 新クメール建築, 近代建築,
カンボジア

Keywords:
Vann Molyvann, Obayashi Corporation, New Khmer Architecture,
Modern Architecture, Cambodia

Masaaki IWAMOTO ——— * 1

The architectural drawings and documents of the works of Vann Molyvann were discovered anew from the archives of Obayashi Corporation in Japan. This paper introduces these documents and clarifies that Vann Molyvann and Obayashi Corporation were in collaboration in the 1950-60s. Through the literature and hearing surveys with Vann Molyvann and former Obayashi staffs, this paper confirms that these documents include the architectural drawings of Chaktomuk Conference Hall and Preah Suramarit National Theatre, prepared by Vann Molyvann, as well as structural drawings and calculations of Cambodian Parliament and Preah Suramarit National Theater, prepared by Obayashi Corporation for Vann Molyvann.

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

ヴァン・モリヴァン (Vann Molyvann) は1956~70年のサンクム・レアストル・ニヨム (人民社会主義共同体) 時代にカンボジアで活躍した建築家であり, 国家元首ノロドム・シハヌークから重用され, スタジアムやプリア・スラムリット国立劇場 (以下, 国立劇場) などの数多くの国家的プロジェクトを手がけた。クメール文化と熱帯の蒸暑気候に根ざした彼の作品群は「新クメール建築」と呼ばれるカンボジアの近代建築運動の中で最重要と考えられている^{注1)}。しかし, 1970年にシハヌークが失脚しカンボジア内戦が始まり, モリヴァンも1971年に亡命を余儀なくされた。彼の作品と資料の多くはクメール・ルーージュによって破壊され, 難を逃れた建物も近年の著しい都市開発の中で解体の危機に瀕している^{注2)}。さらに, モリヴァン本人を含む建設関係者が高齢となり, 新資料の発見や, 資料と証言に基づく作品の客観的評価はますます難しくなると考えられる。

モリヴァンを含む新クメール建築についてはRossとCollinsによる一連の研究^{注3)}がある。また, Greaves率いるNPO団体Vann Molyvann Projectは現存するモリヴァンの作品群を実測調査し, 関係者にヒアリングを行っている^{注4)}。これらの既往研究では, クメール・ルーージュの破壊活動によって図面などの一次資料の大部分が失われたと考えられてきた^{注5)}。RossとCollinsはカンボジア国内で包括的な資料調査を行ったが, そこで見いだされたモリヴァンによる図面は10枚にも満たない。一方, 松原康介の研究ではモリヴァン率いる公共事業電信省に国連スタッフとして協力した建築家・後藤宣夫の蔵書の中にオリンピック・スタジアム初期案を含む図面が発見されている^{注6)}。

このような状況の中で, 筆者は大林組においてモリヴァンの記名入り図面31枚を含む建築資料を発見した。本稿の目的は, この日本国内で見いだされた資料群の内容を報告するとともに, モリヴァンと大林組の協力体制の実態を示すことである。この作業を通じて, 未知の事項が多いサンクム・レアストル・ニヨム時代のカンボジアにおける建設状況の一端を明らかにし, モリヴァンの作家論を展開するための基礎を築きたいと思う。

1.2 研究の方法と本稿の構成

本研究では大林組設計本部 (東京) に保管されていた1950~60年代のカンボジア関連資料 (以下, 大林組資料群と記述) の資料調査と, 当事者へのヒアリング調査 (表1), 現地観察調査^{注7)}を行った。資料調査では記載されている建築物の用途・形状の概要を把握した上で, 既往文献と照合させ検証した。さらに, ヒアリング調査と現地観察調査を通じて資料の信憑性を確認し, 不明な点を補足した。

以下では, 2章においてモリヴァンの経歴を確認し, 3章で新資料発見の経緯とその概要をまとめる。4~7章では新資料を建物別に分類して把握し, 文献調査等によりそれぞれの内容の検証を行う。8章ではモリヴァンと大林組の協働について考察する。

表1 本稿に関わるヒアリング調査の一覧

調査日	ヒアリング対象者	場所	主なヒアリング内容
2015.5.15	ヴァン・モリヴァン	シェムリアップ モリヴァン邸	1) モリヴァンの建築を施工した建設会社に関して 2) 初期作品に関して
2015.7.30	ヴァン・モリヴァン	シェムリアップ モリヴァン邸	大林組資料群を元に1) 国会議事堂, 2) 王立大学法学部校舎, 3) チャクトマック会議場, 4) 国立劇場に関して
2015.8.17	櫻町輝夫, 山崎担 (ともに大林組OB)	東京 帝国ホテル	1) 大林組資料群の作成経緯 2) 農牧医センターと大林組ブノンペン事務所に関して
2015.9.2	石原真雄 (大林組OB)	東京 丸の内ビル	1) 国立劇場の施工に関して 2) モリヴァンとチュルン・ユウ・ハックとの協働に関して

*1 首都大学東京都市環境学部 特任助教・修士 (工学)
(〒192-0397 八王子市南大沢1-1)

*1 Research Assistant Prof., Division of Architecture and Urban Studies, Faculty of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan Univ., M. Eng.

2. ヴァン・モリヴァンの履歴

モリヴァンは1926年11月23日カンボット州レアムに生まれ、1946年に法学生としてパリのソルボンヌ大に留学した。1947年に建築に転向しエコール・デ・ボザールに入学、1955年にディプロマを取得している。1956年にはカンボジアに帰国し、公共建築の主任建築家、公共事業電信省都市計画住宅局長、プノンペン市顧問を兼任した。以後、公共事業電信省長官（1962～64）、王立芸術大学初代学長（1965～67）、国家教育芸術大臣（1967～69）、青年担当国家教育大臣（1969～70）と国家の重職を歴任しながら、建築家としても100を超える計画に携わった。しかし、カンボジア内戦が勃発した翌年の1971年にスイスへ亡命、その後20年間はUN-Habitat等に勤務した。内戦終結後の1991年にはカンボジアに帰国し、文化担当の国務大臣を務め、1995～2001年にはアンコール遺跡管理局であるアプサラ機構の初代総裁を務めた。現在は王国シニア・アドバイザーとしてシェムリアップに在住している。1971年の亡命以後、モリヴァンは建築作品を発表していない。また、1964年以前の計画の多くは公共事業電信省のトップとして関わった国家的プロジェクトであり、本稿で論じる資料はすべてこの時期に作成されたものである。

モリヴァン作品の特徴としては、1)モダニズムの建築言語を基調としながらもアンコール寺院などに代表されるクメール文化を表現したこと、2)通風や遮熱を工夫し蒸暑気候に配慮したこと、3)コンクリートによる独特の構造表現を行ったことが挙げられる^{注8)}。

3. 新資料発見の経緯とその概要

筆者は2015年5月にモリヴァンにヒアリングを行い、1968年に竣工した国立劇場の施工に大林組が関わったという証言を得た。これを受けて大林組に照会したところ、設計本部（東京）が保管するマイクロチップ内に「カンボジア国会議事堂」、「カンボジア劇場（増）」、「プノンペン市民劇場」、「カンボジア農業技術センター（新）」の件名で登録された資料群が見いだされた。それぞれはデジタル化され原資料は棄却されていた。「カンボジア国会議事堂」の件名をもつ資料群には複数の異なる計画の資料が混在しており、これらはカンボジア国会議事堂案、チャクトマック会議場、王立大学法学部校舎に関係すると考えられる（4～6章で詳述）。一方「カンボジア劇場（増）」、「プノンペン市民劇場」の件名をもつ資料群はモリヴァンが示唆した通り1968年に竣工した国立劇場に関係すると考えられる（7章で詳述）。さらに、「カンボジア農業技術センター（新）」の件名をもつ資料群は1964年にバタンバンとコンボンチャムに竣工

した農牧医センターの設備図であると考えられる。農牧医センターは戦後賠償を放棄したカンボジアへの見返りとして日本国が開発援助した計画であり、大林組がカンボジアの建設会社チュルン・ユー・ハック（Chrun You Hak）と協働して設計施工を行った^{注9)}。この計画の図面も1960年代カンボジアにおける日本の海外協力を伝える希少な資料だが、本稿ではモリヴァンが関与した可能性がある他の建築資料に焦点を絞って論述を行う。なお、上記の通り資料内容がマイクロチップに記録された件名と一致しないため、適宜新たに名称と整理番号を与えた。表2に入手した全資料の一覧を示す。

4. 国会議事堂案

4.1 資料内容の把握

次に大林組が保管する資料の内容について建物別に検討する。「カンボジア国会議事堂」という件名の資料群には、「CONCOURS pour la CONSTRUCTION du PARLEMENT du ROYAUME du CAMBODGE（カンボジア王国議事堂建設工事競争入札）」あるいは「PARLEMENT DU CAMBODGE（カンボジア国会議事堂）」と記された構造図（PC-S）と構造計算書（PC-D1）が含まれていた。構造図（PC-S001～139）には標準詳細図・構造伏図・軸組図・配筋図等が126枚あり、他に表紙12枚と図面リスト1枚が含まれる。記載された作成日の大部分は1959年7月25日であり、追加図面とみられる6枚のみ同年10月7日である。さらに「BATIMENT-ENTREPRENEUR OHBAYASHIGUMI（建築請負業者 大林組）」と記載されていることから、大林組が作成したと考えられる。管理者覧には122枚にH. Kashine、2枚にT. Matsumotoと署名され、その他2枚は無署名である。作図者覧には17名の日本人の署名が確認される。一方、構造計算書（PC-D1）には作成者・作成日が記入されていない。しかし、表紙の体裁が構造図と共通していることから、大林組が同時期に作成したと考えるのが妥当だろう。「METHODE JAPONAISE POUR LE EFFORT HORIZONTAL（水平力に対する日本式手法）」といった表現も日本人が構造設計を行ったことを示唆している。計算書の内容は、計算の概略説明と前提整理（1～11頁）、構造図に示された各翼のコンクリート構造の計算（12～184頁）、基礎と上部構造の代替案の提示（185～199頁）、設計変更に対する追加計算^{注10)}（200～203頁）である。

構造図に示される建物全体の平面図（PC-S003、図1）を見ると、一辺75mの正方形の中庭を囲むように東西南北に建物が配置され、中庭中央部にコンクリートの骨組が露出した塔が計画されていることがわかる。図面では、中庭西側の建物は「委員会翼」、東側建物は

表2 大林組資料群の内容一覧

プロジェクト名	整理番号	種類	枚数	資料内容	図面の縮尺	作成年月日	言語	作成者
国会議事堂	PC-S001～139	構造図	139	標準詳細図、構造伏図、軸組図、配筋図、鉄骨梁詳細図、排水計画図等	1/1000～1/10	1959. 7. 25, 1959. 10. 7	仏	大林組（松本崇他16名）
	PC-D1	構造計算書	203	鉄筋コンクリート構造の構造計算書	-	不明	仏	大林組：個人名不明
王立大学法学部校舎	DE-A01	意匠図	12	基礎伏図、平面図、断面図、立面図	1/50	不明	仏	不明
	SC-A01～06	意匠図	6	平面図、立面図、断面図、アクソメ図	1/100, 1/50	1957. 6. 17	日、仏	ヴァン・モリヴァン
	SC-G01	地盤調査図	1	1952年実施されたボーリング調査図	-	1955. 5. 19	仏	不明
	SC-S01～16	構造図	16	基礎伏図、床伏図および基礎、床、バルコニー、階段等の配筋図	1/50～1/5	1958. 10. 6～1959. 6	仏	ヴァン・モリヴァン、他2名
市民劇場 （国立劇場）	TM-A01～14	意匠図	14	配置図、各階平面図、立面図、断面図、断面詳細図	1/200～1/20	1958. 9. 1	仏	ヴァン・モリヴァン
	TM-S01～15	構造図	15	屋根鉄骨伏図、鉄骨詳細図	1/100, 1/20	不明	日、仏	大林組（櫻町輝夫、他2名）
	TM-D1	入札図書（仏文）	34	入札心得書、入札参加書、仕様書、見積参考書、競争入札条件書	-	1959. 9. 1	仏	ヴァン・モリヴァン
	TM-D2	入札図書（和文）	38	同上（和訳）	-	不明	日	不明
	TM-D3	応札書類の一部	2	応札書類の表紙と目次	-	不明	仏	チュルン・ユー・ハック
	TM-D4	構造計算書	22	鉄筋コンクリート構造の構造計算書	-	不明	日	大林組と推測される
	TM-D5	担当者ノート	32	大林組の担当者のノート	-	1957. 12. 6～1960. 9. 20	日	大林組（松本崇）
	TM-D6	担当者のメモ群	5	大林組に残されていた市民劇場に関わるメモ	-	1960. 9. 14, 他不明	日	大林組（松本崇、他不明）
	TM-D7	プノンペン地図	1	STUNG MEAN CHEY交差点付近の地図	1/5000	1955. 5. 19	仏	不明

「ロイヤルエントランス翼」、北側建物は「王国評議会翼」、南側建物は「議員翼」、中庭中央の建物は「中央塔と回廊」と名づけられており、各部の機能の概略を知ることができる。

4.2 文献調査・ヒアリング調査による内容の検証

大林組所蔵の国会議事堂の資料には意匠設計者を示す記述は含まれていないが、RossとCollinsによればモリヴァンは1958年に未完の計画案としてカンボジア議事堂を設計していた^{注11)}。その建設予定地と思われる場所が「Futur Parlement（未来の議事堂）」として1958年に発行されたブノンペン地図^{注12)}に描かれている（図2）。その場所は円形道路の中心であり、大林組所蔵の構造図にみられる建物配置と整合する。これらを総合すると、大林組が所蔵する国会議事堂資料の意匠設計者はモリヴァンであると推測される。

筆者は2015年7月30日にモリヴァンにヒアリングを行い、国会議事堂の構造図（PC-S001～139）が彼のデザインに基づいているという証言を得た。しかし大林組が計画に参加した詳細な経緯は判明せず、建設工事入札に参加したという可能性とチュルン・ユ・ハックの依頼で構造計算を担当したという可能性が示唆されるにとどまった。

構造図の管理者覧に記されたH. Kashine, T. Matsumotoという日本人は、『大林組70年略史』において1959年6月にカンボジア出張したと記述されている樫根英郎と松本崇であると考えられる^{注13)}。

左：図1 国会議事堂案の全体平面図（PC-S003，大林組資料群）
右：図2 1958年発行のブノンペン地図の一部分（出典：参考文献1）

図3 建物A立面図（DE-A08，大林組資料群）

写真1 1961年の王立大学法学部校舎（出典：参考文献2）

5. 王立大学法学部校舎

5.1 資料内容の把握

「カンボジア国会議事堂」の件名をもつ資料群には、「BATIMENT A（建物A）」、「BATIMENT B（建物B）」と記載された意匠図12枚（基礎伏図、平面図、立面図、断面図）が含まれていた（DE-A01～12）。建物Aの平面図には長さ約100m、奥行き約9mの建物が表現されており、これは国会議事堂の設計案とは明らかに異なる。「SALLE DE CLASSE DE 50 ELEVES（学生50人用クラスルーム）」、「SALLE DE PROF（教授室）」といった室名がみられることから、建物Aは学校建築であると推定される。また、建物Bは「AMPHITHEATRE」と名づけられていることから、階段教室であると考えられる。

5.2 文献調査・現地調査・ヒアリング調査による内容の検証

建物Aの立面図（DE-A08，図3）には王家の紋章、外階段などの特徴がみられるが、これらは王立大学法学部校舎（以下、法学部校舎）と一致している（写真1）。筆者は2015年8月に現存する法学部校舎の観察を行い、平面形が建物Bと一致する階段教室の存在を確認した。また、増改築が行われているものの、開口部などに関して建物Aと共通点をもつ校舎の存在を確認した。したがって、DE-A01～12は法学部校舎の図面であると考えられる。RossとCollinsの研究では法学部校舎はモリヴァンの設計で1961年に竣工したとされているが^{注14)}、モリヴァンは2015年7月30日のヒアリングにおいて彼自身は設計者ではなくプロジェクトの責任者だったと述べている^{注15)}。

6. チャクトマック会議場

6.1 資料内容の把握

「カンボジア国会議事堂」の件名をもつ資料群には、「UNE SALLE DE CONFERENCE（会議場）」と記載された意匠図6枚（SC-A01～06）と構造図16枚（SC-A01～16）が含まれていた。また、構造図とともにボーリング調査図1枚（SC-G01）が見つかった。これらの図面では、国会議事堂の設計案とは明らかに異なる建築が表現されている。次頁の表3に会議場に関わる資料の一覧を記す。

意匠図（SC-A01～06）にはすべてVANN MOLYVANNと記名されており、判読が困難な1枚を除いて1957年6月17日という作成日が確認できる。図面番号が記されているが連続していないため、一式の図面の一部のみが大林組に保管されていたと考えられる。

構造図16枚（SC-A01～16）には図面番号が記されていない。うち11枚には「CONSTRUCTION D'UNE SALLE DE CONFERENCE A PHNOM PENH（ブノンペンの会議場建設）」と記載され、作成日は1958年10月、1959年1月、同年3月のいずれかである。また建築家（ARCHITECTE）としてVANN MOLYVANN、顧問技師（INGENIEUR CONSEIL）としてM. DELACOUR、建築技師（INGENIEUR ARCHITECTE）としてKEI FAN CHANの名が記されている。残り5枚は階段配筋図であり、計画名も作成者も作成年も記されていないが、内容は他の図面と対応している。

ボーリング調査図（SC-G01）の題名は「RELEVÉ DES SONDAGES EFFECTUES EN 1952 CONCOURS POUR LA CONSTRUCTION D'UN PONT SUR LE TONLE-SAP A PHNOM PENH」であり、トンレサップ川に架かる橋の入札図書として用意された資料であると考えられる^{注16)}。会議場はトンレサップ川に面しているため、設計時にこの地盤調査図を参照した可能性がある。図面左上には「19-5-1955」と記されており、これが調査図の作成日であると推測される。

6.2 文献調査・現地調査・ヒアリング調査による内容の検証

意匠図の平面図（SC-A01、図4）からは扇形の客席及び舞台をホイエとバルコニーが囲む計画が確認される。また、立面図（SC-A02、図5）からは独特の屋根形状と扇形の頂点に装飾的な塔が立つ全体構成が確認される。これらの特徴は、現存するチャクトマック会議場（1961年竣工）と一致する^{注17)}。この会議場に関し、『日綿70年史』に写真（写真2）と以下の記述が見いだされた-「プノンペン市議会議堂 約千名収容できる国際会議堂である。昭和三十五年（一九六〇）二月カンボジャ政府の資材買付のための調査団が来日した機会に、当社は株式会社大林組の技術援助をうけて、積極的に我国の主要議事堂を案内し、設計および見積りに協力した。この結果、当社より全資材を供給することになり、設計および建築もカンボジャ土木省のレイアウトにより現地業者と協力して施行した。昭和三十六年十二月に全館完成し、国際仏教会議をもって開館された（後略）」^{注18)}。ここでは日綿と大林組の協力が示唆され、日綿が会議場の施工に携わり全資材を供給したとされている。2015年7月30日のヒアリング調査において、モリヴァンは大林組が所蔵する会議場の図面は彼自身によるチャクトマック会議場の図面であると証言した。また、構造図に記名されたDELACOURは公共事業電信省に勤務していたフランス人技術者であり、KEI FAN CHANは中国人の技術者であると証言した。しかし大林組が施工に関わったかは判然とせず、屋根の構造材と仕上げ材を日綿経由で日本から輸入したのではないかと示唆するとどまった。さらに筆者は複数の大林組OBにヒアリングを行い、大林組が戦後に完成させた海外建築第1号は農牧医センターであり、大林組がチャクトマック会議場の施工に関わったとは考えにくいという証言を得た^{注19)}。モリヴァンと大林組OBの証言を総合すると、大林組が会議場や先述した法学部校舎の施工に関わった可能性は薄く、両者の図面は議事堂を設計するための資料だったと考えられる。

7. 市民劇場（国立劇場）

7.1 内容の把握

「カンボジア劇場（増）」、「プノンペン市民劇場」の件名をもつ資料群には、意匠図14枚（TM-A01～14）と構造図15枚（TM-S01～S15）の他、建設工事の入札・応札に関わるとみられる書類7組（TM-D1～D7）が含まれていた。プノンペンの地図の抜粋（TM-D7）を除き、そのすべてには「Theatre Municipal」や「プノンペン市民劇場」と計画名が記載されている。意匠図14枚（TM-A01～14）にはすべてVANN MOLYVANNと署名されており、内容は配置図、平面図、立面図、断面図、断面詳細図、アクソノメトリック図である。配置図（TM-A01）を除く13枚には1958年9月1日という作成日が確認できる。

仏語の入札図書（TM-D1）は「CAHIER DES CHARGES PARTICULIERES（特記要項書）」1頁、「MODELE DE SOUMISSION（入札参加書）」2頁、「DEVIS DESCRIPTIF（見積仕様書）」15頁、「DETAIL ESTIMATIF SOMMAIRE（詳細見積参考書）」7頁、「CONDITIONS DU CONCOURS（入札条件書）」4頁の五部に目次1頁を加えた書類であり、作成日は1959年9月1日と記されている。この書類にもVANN MOLYVANNの記名と署名があることから、モリヴァンが劇場の建設工事競争入札の参加予定者に配布した資料であると考えられる。和文の入札図書（TM-D2）はTM-D1を和訳したものである。さらに資料群には「CONCOURS DE LA CONSTRUCTION DU THEATRE MUNICIPAL DE PHNOM PENH, Avant-projet de béton armé

表3 会議場に関わる資料の一覧

整理番号	資料名称(筆者による和訳)	縮尺	作成年月日	図番	記名者
SC-A01	平面図	1/50	判読不能	4	VM
SC-A02	川側立面図	1/50	1957.6.17	6	VM
SC-A03	長手断面図（F軸）	1/50	1957.6.17	9	VM
SC-A04	エントランス部断面図（A軸B軸間）	1/50	1957.6.17	10	VM
SC-A05	断面図	1/50	1957.6.17	11	VM
SC-A06	アクソノメトリック図	1/100	1957.6.17	12	VM
SC-G01	ボーリング調査図	-	1957.6.17	-	-
SC-S01	基礎・地中梁配筋図	1/20	1958.10.6	-	VM, MD, KFC
SC-S02	ケーソン配筋図	1/10	1958.10.6	-	VM, MD, KFC
SC-S03	基礎伏図	1/50	1958.10.6	-	VM, MD, KFC
SC-S04	バルコニー配筋図	1/20	1959.1	-	VM, MD, KFC
SC-S05	バルコニー床伏図	1/50	1959.1	-	VM, MD, KFC
SC-S06	バルコニー配筋図	1/20	1959.1	-	VM, MD, KFC
SC-S07	高さ3.89m～4.14mの梁配筋図	1/20	1959.3	-	VM, MD, KFC
SC-S08	高さ2.64mのバルコニー配筋図	1/20	1959.3	-	VM, MD, KFC
SC-S09	主要階段配筋図 No.1	-	-	-	-
SC-S10	階段配筋図 No.2	-	-	-	-
SC-S11	階段配筋図 No.3	1/10	-	-	-
SC-S12	シルト土壌における舞台階段配筋図 No.4	1/50, 1/20	-	-	-
SC-S13	階段配筋図 No.5	-	-	-	-
SC-S14	階段配筋図 No.6	1/10	1959.3	-	VM, MD, KFC
SC-S15	ホワイエ昇降部配筋図 No.7	1/5, 1/10	1959	-	VM, MD, KFC
SC-S16	ホワイエ床配筋図	1/50, 1/20	1959.6	-	VM, MD, KFC

[凡例] -:無記載 VM: Vann Molyvann, MD: M. Delacour, KFC: Kei Fan Chan

図4 会議場平面図（SC-A01、大林組資料群）

図5 会議場川側立面図（SC-A02、大林組資料群）

写真2 チャクトマック会議場（出典:参考文献9）

（市民劇場建設工事競争入札・コンクリート構造素案）」と題された表紙と図面リストが含まれており（TM-D3）、これは応札図書の一部と考えられる。この資料にはチュルン・ユー・ハック（CHRUN YOU HAK）の名が記されている。

これら資料とともに保管されていた和文書きの担当者ノート（TM-D5）には、1959年6月9日と記された頁に「CHRUN 基礎関係 技術屋にただす」「入札 8/15」「政府 公共事業省 出向すること」「日綿 現地駐在員 金口氏」といった文言がみられる。また、同年6月10日と記された頁には「質問書 日綿より返してもらうこと」という一節とともに入札に関わる質問事項が列挙されている。ノートには他にも「チュルン」「日綿」に関する言及が頻出しており、大林組が日本の総合商社である日綿の仲介でチュルン・ユー・ハックと手を組み、8月15日締め切りの入札に参加したと推測される。さらに、このノートの1960年9月7日と記入された頁には、大林組が実質的に特命で選ばれ、モリヴァンの指示を受けて縮小案の検討をはじめたことが示唆されている^{注20)}。

ノートの内容は、1960年9月14日と記された担当者メモ（TM-D6）の内容と整合している。このメモでは「日綿山岸氏よりカンボジヤ土木局長バンモリバンより電報」という一節の後にモリヴァンの指示とみられる縮小案の方針が記され、文末には「松本受」と記されている。なお担当者メモとノートは筆跡が一致することから、作成者は同人物であると考えられる。ノートの内容には6月21日～30日にかけてのカンボジア出張の予定も記されているが、この期間は『大林組70年略史』に記された松本崇のカンボジア出張期間と整合しているため^{注21)}、「松本」は松本崇のことであると考えられる。

一方、日本語で書かれた鉄骨屋根の構造図15枚（TM-S01～S15）にはデザイナー覧にOHBAYASHI-GUMI, LTD、建設者覧にCHRUN YOU HAKと記されており、署名はされていないが承認者覧にVANN MOLYVANNと記されている。ここから、この構造図を作成したのは大林組であり、モリヴァンがそれを承認する立場にあったことが読み取れる。また、作図者覧にはT. Sakuramachi, M. Fujiwara, H. Takahasi、検図者覧にはY. Tao、提出者覧にはH. Kashineと署名されている。

構造計算書（TM-D6）には作成者・作成日の記載はないが、12頁目に「鉄筋コンクリート：プノンペン市立劇場 計算書」という表記がある。計算書の内容はコンクリート躯体の構造計算である。

7.2 文献調査・ヒアリング調査による内容の検証

立面図（TM-A13、図6）に示されるピロティ、横連窓、ピラミッド状の塔屋などの特徴は国立劇場（1968年竣工、写真3）と類似している。ゆえに、大林組資料群内の市民劇場資料は国立劇場に関するものと考えられる。国立劇場はオリンピック・スタジアムとチャクトマック会議場とともにモリヴァンが自らの代表作として挙げる三作品の一つだが、1994年に火災に見舞われ2008年に解体された。2015年7月30日に行ったヒアリングにおいて、モリヴァンは意匠図（TM-A01～14）が彼自身による図面であり、縮小以前の初期案であると証言した。また、国際的な競争入札が行われ、チュルン・ユー・ハックが大林組と手を組んだと述べた。

意匠図（TM-A01～14）にみられる屋根の規模は、構造図の鉄骨屋根伏図（TM-S01、図7）と一致しない。しかし、Vann Molyvann Projectが作成した実測による平面図^{注22)}は構造図の屋根伏図と形状がほぼ一致する。ゆえに構造図は実際に建設された縮小案を示していると

写真3 プリア・スラムリット国立劇場（モリヴァン所蔵）

図6 市民劇場立面図（TM-A13、大林組資料群）

図7 市民劇場構造図（TM-S01、大林組資料群）

考えられる。一方、構造計算書の2頁目では荷重計算のために「舞台上部のピラミッド塔」の平面形状が20×27mと仮定されているが、これは意匠図に示されたピラミッド状の塔屋の平面形とほぼ一致する。ゆえに計算書は意匠図、つまり初期案に対応すると考えられる。

筆者は2015年8月17日に大林組OBの櫻町輝夫氏（1957年入社）と山崎坦氏（同）にヒアリングを行い、櫻町氏から作図者のT. SakuramachiとM. Fujiwaraが当時大林組で構造を担当していた櫻町輝夫と藤原正義であり、検図者Y. Taoが田尾良温、提出者H. Kashineが樫根英郎であると確認した。また、山崎氏からは劇場と同時期に施工された農牧医センターの施工者が大林組とチュルン・ユー・ハックであり、大林組は日綿のプノンペン事務所の一角を借りて農牧医センターと劇場の工事事務所を設置していたという証言を得た。さらに、筆者は2015年9月2日に劇場の担当者として1963年7月～64年4月にプノンペン駐在した大林組OBの石原真雄氏（1961年入社）にヒアリングを行い、市民劇場の縮小案の実施図面を大林組が作成し、施工をチュルン・ユー・ハックが行い、石原氏が「日本式の図面の意図をチュルンのスタッフに伝える」役割を担ったという証言を得た。

以上から大林組所蔵の劇場資料の作成経緯は次のように推測される。まず、モリヴァンが1958年9月に意匠図（TM-A）を作成し、これを含めて翌年9月1日に入札図書（TM-D1）が完成した。大林組はチュ

ルン・ユー・ハックと手を組み、遅くとも1959年6月の段階で入札への参加を決めた。その後、モリヴァンの設計に基づき構造計算書（TM-D6）が作成された。1960年9月に大林組とチュルン・ユー・ハックが特命で選ばれ、モリヴァンの依頼により縮小案の検討がはじまり、おそらく1961～62年の間に構造図（TM-S）が作成された。

8. ヴァン・モリヴァンと大林組の協力体制

大林組資料群は1950～60年代におけるモリヴァンと大林組の協力体制の存在を示している。独立後まもなくのカンボジアに30歳という若さで帰国し、次々と国家的プロジェクトを成功させたモリヴァンの背景には国際的な協力者の存在が指摘されてきた。既往研究では構造家ウラジミール・ボディアンスキー（Vladimir Bodiansky）、東工大清家研出身の建築家である番匠谷堯二や後藤宣夫などの存在が明らかになっている^{注23)}。しかし、大林組には既知の協働者たちとは異なる点がある。それは現地に駐在員をおき、設計のみならず施工にも関与したことである。さらに、大林組OBの石原氏は大林組が資材調達にも関わっていたと述べ、具体例として劇場の屋根部材が千葉の鉄工所で生産されたと言及している。この証言は現地生産でできる材料が限られていた1960年代のプノンペンにおける建設状況の一端を明らかにしている。また、石原氏は大林組の設計部が劇場の縮小案の実施設計を行ったと述べている。短期間に数多くのプロジェクトを完成させたモリヴァンの設計体制は詳細が未知であり、彼自身も多くを語っていないが、石原の証言が事実だとすれば以下のような仮説が立てられる。すなわち、モリヴァンはいくつかのプロジェクトでは主に基本設計を行い、実施設計を外部に委ねることで多数のプロジェクトを並行して進めていたのではないだろうか。但し、これはモリヴァンが実施設計以降のプロセスを放棄したという意味ではない。劇場の入札図書（TM-D1）では「当方の建築家」、すなわちモリヴァンが工事指導者として位置づけられている。また、石原氏は大林組設計本部が原設計を尊重して実施設計を行ったと述べており、同様の姿勢は構造計算書（TM-D6）にも読み取れる。計算書では、経済合理性よりも原設計のデザインを優先させて柱梁断面と配筋を決めたと注記されているからである。これらの事実から、モリヴァンと大林組は互いを尊重し合う良好な協働関係を築いていたと考えられる。同様に、モリヴァンはあたかもシハヌークの中立外交のごとく世界中の専門家や企業の協力を集め、自らの構想を短期間に実現させたのではないだろうか。

9. まとめ

以上、本稿では新たに発見した大林組資料群を整理し、文献調査・現地調査・ヒアリング調査を通じて資料が示す建築とその関与者を特定した。また、既往研究では触れられていないモリヴァンと大林組の協働の存在を示し、国立劇場の計画においては設計段階から大林組が関与していたことを具体的に明らかにした。大林組資料群はクメール・ルージュにより破壊されたと考えられてきたモリヴァンの最初期のプロジェクトの一次資料であり、モリヴァン自らが代表作と認めるチャクトマック会議場と国立劇場に加え、既往研究において一切の詳細が未知だった国会議事堂案を含んでいる。これらの資料を個別に精査してモリヴァンの設計手法を分析し、意匠論を展開することが今後の課題である。

本稿執筆にあたり、ヴァン・モリヴァン氏、Darryl Collins 氏、Sokuntheary 氏、大林組 OB の櫻町輝夫氏、山崎担氏、石原真雄氏、大林組職員の佐野悦子氏に多大なご協力をいただいた。謝意を表す。なお、本稿は首都大学東京アジア高度研究の成果の一部である。

参考文献

- 1) Service géographique des F.A.R.K: PHNOM PENH, Echelle 1/12,500, Phnom Penh, 1958
- 2) Neak Cheat Niyum: Album des principales réalisations des Gouvernements Sangkum Reastr Niyum offert par l'Hébdomadaire "Neak Cheat Niyum" (Le Nationaliste) à l'Occasion du Chaul Chhnam Chout Année 2503 de l'Ere Bouddhique (1960-1961), Phnom Penh, 1961
- 3) Ross, H.G. and Collins, D.: National sports complex in peril, Cambodia 1964, docomomo, No.30, pp.53-56, Paris, 2004.6
- 4) Ross, H.G.: The House That Vann Molyvann Built, mAAAN The 6th International Conference, pp.142-152, Tokyo, 2006.11
- 5) Ross, H.G. and Collins, D.L.: Building Cambodia: 'New Khmer Architecture' 1953-1970, Key Publisher, Bangkok, 2006.12
- 6) Collins, D.: Vann Molyvann: Situating the works of Cambodia's most influential architect, Perspecta, No.45, pp.77-88, Cambridge, 2012.8
- 7) Matsubara, K.: Japanese Collaborators in the Golden Age of Modern Khmer City and Architecture in Cambodia, 15th SCA Conference, pp.13-18, Siem Reap, 2015.5
- 8) 大林組編:大林組 70 年略史, 大林組, 1961.9
- 9) 日綿実業株式会社社史編纂委員会編:日綿 70 年史,日綿実業, 1962.1

注

- 1) 参考文献 5) を参照した。
- 2) 参考文献 3) を参照した。
- 3) Ross と Collins の研究には参考文献 3)～6) などがある。
- 4) Vann Molyvann Project は 2009 年に Bill Greaves により開設された NPO 団体で、現存するモリヴァン作品の実測図面や模型の制作を行っている。
- 5) 参考文献 4) において Ross は「ヴァン・モリヴァン事務所に残されていた資料と公共事業省の彼のアーカイブはすべてクメール・ルージュにより破壊された」と述べている。
- 6) 参考文献 7) を参照した。
- 7) 本稿で論じるチャクトマック会議場の現地観察調査は 2015 年 5 月 13 日に、王立大学法学部校舎の現地観察調査は 2015 年 8 月 3 日に行った。
- 8) モリヴァンの履歴と作品特徴については参考文献 3), 5), 6) を参照した。
- 9) ヒアリング調査における櫻町輝夫氏（1957 年入社）、山崎担氏（同）の証言、2015. 8. 17。山崎氏は農牧医センターの現場管理を担当した。
- 10) PC-D1 の 200 頁目には「設計変更の理由 1959 年 6 月 26 日付 RECTIFICATIF により NIVEAU0,00 の床を鉄筋コンクリート造に変更する これによって 0,00 レベルの床版、小梁及び基礎を追加設計する」と書かれており、以降の 4 頁 (200～203 頁) は同設計変更に対する追加計算であると考えられる。
- 11) 参考文献 5) を参照した。
- 12) 参考文献 3) を参照した (Darryl Collins 氏所蔵)。
- 13) 参考文献 8) を参照した。
- 14) 参考文献 5) を参照した。
- 15) モリヴァンは、法学部校舎の設計者はフランス人だったと述べている。
- 16) この橋は、富士車輛が施工した通称「日本橋」と考えられる。
- 17) 現地観察調査 (2015. 5. 13) との整合を確認した。
- 18) 参考文献 9) を参照した。
- 19) この証言は櫻町輝夫氏、山崎担氏、石原真雄氏より得た。
- 20) 担当者ノート (TM-D5) 27 頁には「35. 9. 7 於日綿 (中略) 土木省より大林宛依頼状 実質的 (1 字判読困難) は特命」と記され、客席の減少や一部階段の中止などのモリヴァン指示による縮小案の方針が示されている。
- 21) 参考文献 8) を参照した。
- 22) <http://www.vannmolyvannproject.org/> に実測図面が公開されている。
- 23) 参考文献 5) と 7) を参照した。

[2015 年 10 月 7 日原稿受理 2015 年 12 月 16 日採用決定]